

山内昌之

(歴史学者)

が語る

我が人生の書棚

歴史の中で苦闘した先達の書に学んだ
人生の喜びや楽しみ、苦しみや悩み

私は北海道大学の「文類」(文系) 学部に進む。当時)に入學後、

いろいろと迷いましたが、事物を具体的な文脈で考えることが好きで中学生の時から『史記』を愛読していたこともあり、歴史学への関心を深め、文学部史学科へと進み、以来今日に至っています。

しかし、年老いるに従い、果たしてそれで良かったのかと、夢にまで見るのです。率直に言って、文学部は男子が一生を捧げるに相応しいところなのかと、自分の選択をいつも懐疑的に振り返りました。人生の選択を先に延ばし、社会との関係の選択も曖昧にしておく。文学部にはそういうモラトリアム的な側面がたまにあってからです。経済や法にも関心があり、早く大学を卒業して社会のために役立つという願望もあっただけに、実業や役人の世界に入っていたら、どうなっていたらどうか、つい想像するのです。その一方、

東大教授を辞めて実社会にいる人達と接してみようと、世の中に役立つ物やサービスを提供できる喜びや楽しみに満足を感じ、失敗すれば苦しみや悩みを味わっていることがわかりました。人はそうした様々な思いについて理解するために本を読むのですが、苦悩や悲喜は文学部の学問が扱う領域です。とすれば、文学部も

長期的には世の中に役立っているのかとも考えました。

私が大きな影響を受けた本としてここに挙げる3作には共通点があり、それはいずれも、人生における苦しみや悩み、喜びや楽しみなどを深く感じさせる書物だということです。しかも、抽象的ではなく、自分自身が経験した歴史や人生、生活の中で具体的に語っているのです。いずれも大学に

の挫折がありますが、それについても反省的に語り、後醍醐天皇に対しても批判的です。つまり、歴史というものを非常に冷徹なリアリズムで見ている。そこがこの書の魅力的なところなのです。

アラブのベドウィン部隊を指導しながらオスマン帝国と戦います。世界史上、初めてゲリラ戦の概念を編み出した天才的軍人です。しかし、戦後、アラブ世界をヨーロッパ諸国の都合で人工的に分割するという欺瞞に自分も加担してしまっただけ。そのことについての苦悩も書かれています。

同じように歴史の中での人間の苦悩を感じさせるのが、『神皇正統記』(③)。後醍醐天皇に仕えた政治家北畠親房が書いた歴代天皇の年代記で、日本と日本人のアイデンティティを問う書です。その背景には後醍醐天皇の「建武の新政」

東大教授を辞めて実社会にいる人達と接してみようと、世の中に役立つ物やサービスを提供できる喜びや楽しみに満足を感じ、失敗すれば苦しみや悩みを味わっていることがわかりました。人はそうした様々な思いについて理解するために本を読むのですが、苦悩や悲喜は文学部の学問が扱う領域です。とすれば、文学部も



やまうち・まさゆき / 1947年北海道生まれ。東京大学名誉教授。ムハンマド5世大学(モロッコ)特別客員教授。サントリー学芸賞、毎日出版文化賞、吉野作造賞、司馬遼太郎賞など受賞歴多数。2006年業績褒章受章。近著に『愚の指導者(リーダー)論』(小学館新書、佐藤優氏との共著)。

私が入った頃に初めて読み、以来、折あるごとに読み直しています。

まずモンテニユの『エッセー』(①)は、ご承知のように、ルネサンスを代表するフランスの哲学者が人間について考察した書です。モンテニユは、フランス宗教戦争の時代を生きました。彼自身はカトリックの立場でしたが、プロテスタントにも人脈を持ち、両者の協調、妥協に努め、殺戮やフラ

この3つの書の著者に共通しているのは、自分の政治的、社会的立場にかかわらず、自分の外にも一人の醒めた自分を持ち、その自分が自分を見つめることで物を書いていることです。私はそうした姿勢と視角に興味があります。

私は月刊「文藝春秋」2018年1月号から「將軍の世紀」という連載を始めました。江戸時代史を描くことで天皇と將軍の政治関係を照射する試みです。イスラム史や中東政治の専門家と思われる私がなぜ、そのようなものを書くのか? それは、ここに挙げた3人の先達にはもちろん及びま

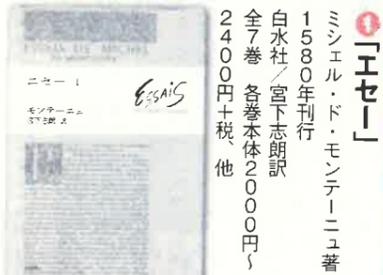
せんが、やはり自分の学問と人生を考えると、その外側に自分を眺めるもう一人の自分を持つことが大切だと考えるからです。

ちなみに、私は中学時代から大河小説が好きで、吉川英治の『新・平家物語』や子母沢寛の『勝海舟』とか『父子鷹』などを読んでいました。そうした作品を通して、日本人の血と肉となった文化や、伝統の世界に接していたのだと思います。古稀を迎えて『將軍の世紀』を書きたくなったのは、少年の頃から感じていた父祖たちの心と魂の呼び掛けに心えたいという動機があるからかもしれません。

『神皇正統記』(③)は、後醍醐天皇に仕えた政治家北畠親房が書いた歴代天皇の年代記で、日本と日本人のアイデンティティを問う書です。その背景には後醍醐天皇の「建武の新政」



冷徹なりアリズムで歴史を見ていることが魅力的



思索することの奥深さを教えてくれた



歴史的欺瞞に加担してしまった自分自身の苦悩も吐露した

『知恵の七柱』(②)は、「アラビアのロレンス」として知られるイギリス人T. E. ロレンスの回想録。彼はオックスフォード大学出身の考古学者ですが、第一次世界大戦が始まると陸軍情報部員となり、

書籍データ中の刊行年(発表年)は最初の版のもの。版元、訳者、価格は現在入手できるおもな版のもの。

DAPIO (サピオ)
2018.1.2
小学館